私のテーマ

京都における土佐藩の政治活動

髙山　嘉明

幕末期の有力藩のひとつである土佐藩の政治活動を明らかにすることが、筆者の目下の課題である。なかでも最大の関心事は、尊王という言葉で表される概念の実態を解明することである。

尊王という言葉の多様性

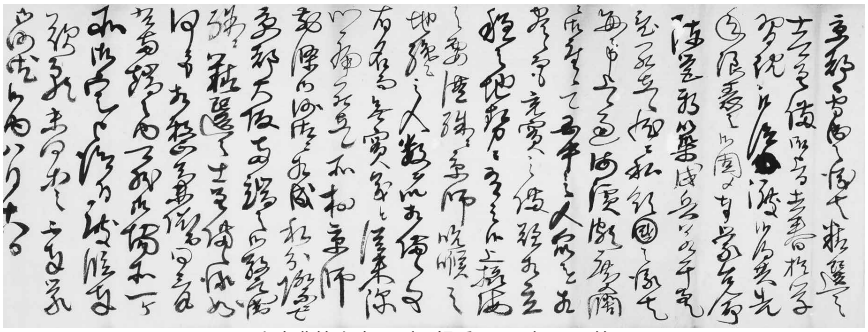
幕末期、特に文久年間の政治は、尊王という言葉なしには論じられないといっても過言ではないだろう。それと攘夷とが結びついて成立した「尊王攘夷」は、幕末を代表する政治概念として知られるし、その政治的実践というべき尊王攘夷運動は、まさに文久年間に最盛期を迎え、これを主導した勢力が当時の政局をリードした。尊王という言葉を文字通りに解釈すれば、天皇（朝廷）に対して忠義を尽くすといった意味合いになるが、現実的には、これ以外にも様々な解釈が必要となる。直接朝廷との関係を示すことはもちろん、朝幕関係を基本にすれば、尊王は朝廷を介して結果的に幕府との関係を示すものでもある。また、尊王の実践が重要課題となり各勢力がその度合いを競ったことで、藩の立場からは、尊王が他藩との関係を示すことにもなった。

藩邸史料から

さて、坂本龍馬記念館が所蔵する「土佐藩京都藩邸史料」という史料群がある。この藩邸史料は、土佐藩の京都における活動実態はもちろん、京都情勢全体を明らかにするための格好の素材であることから、積極的な活用が望まれる。ここからは、上に示した大きなテーマの具体例として、藩邸史料にもとづいて若干の考察を加えたい。当然のことながら、この史料の舞台は京都である。京都で土佐藩に課された大きな任務のひとつとして、京都市中や御所周辺の警衛があったが、特に御所警衛は尊王の実践の場としても重要な意味を持った。この任務を中心に、土佐藩の立場や意識を探りたい。

藩邸史料のなかに「宮様」（中川宮朝彦親王と推定）に関する記述がある。この「宮様」より、身辺の護衛のため土佐藩の部隊から七・八人を借り受けたいとの依頼があった際、その是非を問うべく現場の藩士から意見書が出された（目録番号462）。京都の警衛は自分たちが「苦勤」するところであるが、それでも「天朝之御用筋」ならば仕方ない。ところが、今回の依頼はあくまで「御私情之御筋合」（宮の私的な護衛）であって、「天朝之御用筋」にはあたらないとする。「宮様」は言うまでもなく天皇の血族である。よって、その護衛を任されることは、尊王の実践という観点からも、藩にとって名誉なことと考えられそうなものである。しかし、この意見はそれを全面的に否定する。御所周辺の警衛が尊王の意味を持ったとはいっても、その対象がかなり限定的に理解されていたことは興味深い。

次に、元治元（一八六四）年三月下旬、藩主山内豊範から幕府へ提出された上書に注目したい（目録番号101）。この時、土佐藩は、警衛を担う場所が京都になるか大坂になるかの岐路に立っていた。この上書によれば、まず土佐藩は、「京都御守衛」は朝廷から、「浪表之御固メ」（大坂警衛）は幕府から命じられたものと認識した。これをもとに、どちらか一か所に専念することを望んだ土佐藩は、京都か大坂かの選択について、「何卒叡慮遵奉、御勅答之御趣意厚奉引受度念願」を表明する。「叡慮」も「勅答」も、天皇から示された意思を表す言葉である。これを「遵奉」したい、つまり天皇から与えられた京都警衛の任務を全うすることを希望したのである。そして、これを幕府に対して願っている点も、尊王の概念の複雑さをよく表している。



山内豊範上書写（目録番号101）の一節

尊王という言葉は実に複雑で、容易に理解しがたいところがある反面、その奥深さから、幕末史の研究において様々な可能性を持っているように思う。幕末の土佐藩政史を全国的規模でとらえることが必要と考える筆者にとって、京都という政治の中心地での土佐藩の活動を明らかにすること、なかでも尊王という概念に注目することは、その一つの有効な方法であると考えている。

第2回 龍馬のひろば

「龍馬のひろば」へ　ようこそ！

「第２回　龍馬のひろば」へご参加いただき、ありがとうございます。

この企画は坂本龍馬記念館・現代龍馬学会に集う仲間が、気軽に意見交換し、会員としての一体感を今まで以上に感じてもらうためにはどうすればいいか等々を考える中で生まれました。

現代龍馬学会の入会案内には次の文が見られます。…「現代龍馬学会」はさまざまな分野のプロフェッショナルたちが新しい視点で「龍馬を語る」学会です。坂本龍馬の思想と行動に学び、その精神を現代に活かすために有志が集まり、発足いたしました。…

現代龍馬学会は、来年４月で発足 10 周年を迎えます。様々な思いを抱く会員一人ひとりがこの「龍馬のひろば」を通じて自由に語り合えるようになった時、新しい歩みが始まるような気がします。お手元にハガキが残されている会員さんは、ぜひ「私のお薦め本」について玉稿をお寄せくださるようにお願いいたします。

現代龍馬学会 会長　宮　英司

龍馬に関する図書で、あなたの愛読書は何でしょうか？

高知市　広谷喜十郎

「海援隊始末記」

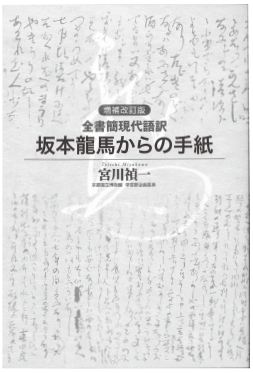
平尾道雄
中央公論社

私はこの原本を昭和29年に大学一年生の時に読んで以来、手元においている本です。これは、いま中公文庫として全国の龍馬ファンに愛読されております。平尾先生の「龍馬のすべて（高知新聞社刊）」と「明治維新と坂本龍馬（新人物往来社刊）」の３冊があれば、入門書として十分だと思います。あとは、この本から得た問題をさぐり、それぞれの分野へ開拓しているようです。私は「坂本龍馬と現代」というテーマを得て50編余り書いています。

高知市　守谷孝男

「坂本龍馬からの手紙」

宮川禎一
教育評論社



ノンフィクションだから。そして、現代語訳だから。

福岡県大牟田市　幸田義勝

「その時、龍馬は、新選組は」

赤尾博章 青木繁男 監修
株式会社ユニプラン

幕末の出来事を、年表ごとに詳しく書かれている。

龍馬の動きを中心として、新選組をはじめ、多くの勤王の志士の動き、幕府側の動き、新選組の動き、新政府側の動き等に、西暦・和暦・月日が分かり安く書かれている。

また、幕末期に活躍した多くの人物の解説もあり、大変資料として利用できる。

日付までを明記した詳細年表で幕末の“あの日”がよみがえる。

高知市　岡崎洋一郎

「龍馬のすべて」

平尾道雄
高知新聞社

〈史実を追った龍馬のバイブル〉

なんと言っても龍馬関係の

出版書籍の中で、平尾先生の「龍馬のすべて」だと思う。数多い龍馬本の中でその原点となる龍馬の史実を追い、司馬龍馬をはじめ幾多の龍馬本のバイブルです。マリアスジャンセン氏によって海外に龍馬を紹介することにもつながりました。昭和60年の初版以来再版を重ねていることでもその貴重さが証明されています。龍馬を語り龍馬小説等のフィクションと対比する史実の私自身のバイブルでもあります。

高知市　大﨑隆徳

「誰が坂本龍馬をつくったか」

河合　敦　角川SSコミュニケーションズ

坂本龍馬の活躍は必ずしも本人の力だけでなく、運命に導かれたのだと感じる一冊です。

最初から龍馬がヒーローであったわけではない。龍馬を

して英雄に仕立て上げた人々が存在するのである。は印象的な言葉です。

龍馬に脱藩を決意させたと言われる人物、久坂玄瑞。西郷隆盛が龍馬を側面からサポートしたのでは。等の記述が興味深い。

彼を取り巻く多くの人により、彼は「英雄・龍馬」となったと思える本です。

高知市　根木勢介

「司馬遼太郎全講演1～5巻」

朝日文庫　朝日新聞出版

私には龍馬に関する愛読書は特にない。「龍馬の置かれた時代環境を視野に研究してゆきたい」と思っているが、参考になるのが司馬遼太郎さんの著作集。数ある著作集の中でも特に示唆に富み、参考になるのが、司馬さんの「講演集」である。司馬さんは、全

国各地で講演。各地の歴史や人物を折りこみながらの講演は、龍馬研究の上でも、時代環境を考える上でも、ヒントがいっぱい詰まっている。

札幌市　村田　拓一

「龍馬、蝦夷地を開きたく」

合田一道　寿郎社

「龍馬、蝦夷地を開きたく」は、龍馬が北海道開拓のため4回も蝦夷地行きを進めながら、実現できないまま凶刀に倒れ、その精神を受け継いだ龍馬の甥達が夢を実現する内容の本です。

平成16年6月に刊行されましたが、北海道命名150年の年に、もう一度、龍馬が幕末から明治に移行する激動中、日本のための北海道開拓への思いを知ることができる貴重な本です。

ほっかいどう龍馬会　世話人

副代表　村田　拓一

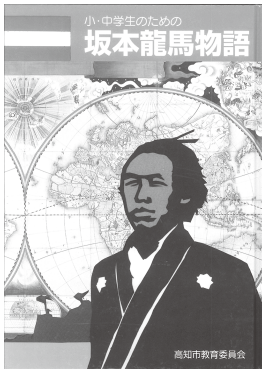
高知市　宮　英司

「小中学生のための坂本龍馬物語」

高知市教育委員会

歴史を学習していない小学5年生でも理解できる龍馬物語」を目指した本である。当時の高知市長さんが「龍馬都市」宣言をされたので、各部署がそれぞれに龍馬に関する施策を立ち上げる中で誕生した。

前半が絵本、後半が資料編。子どもも大人も楽しめる出来栄えとなった。今、途絶えているのが残念でならない。お土産に最適の図書の一日も早い復活を念じて、好きな理由に代えさせていただく。

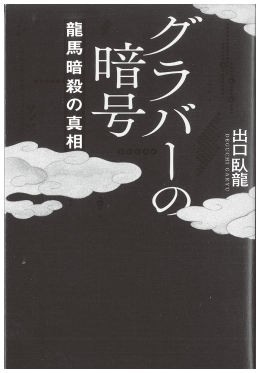


千葉県柏市　出口龍彦

「グラバーの暗号 ― 龍馬暗殺の真相」

幻冬舎

まことに僭越ながら拙著『グラバーの暗号』を紹介させてください。大航海時代以来、欧米列強は植民地拡張に血道をあげた。英国はインド、中国についで金銀の産地日本を標的にした。内乱の動きを察した英国は武器弾薬を売り込む。グラバーはその手先だった。内乱収拾に動いたのが龍馬だ。「邪魔者は消せ」英国に頭のあがらない西郷が龍馬暗殺を指示した。武器弾薬代金の焦げ付きでグラバーは破産。真犯人を三菱のビールに忍ばせた。



こぼれ話 ― 犬歩棒当記（三十六）―

絵葉書の時代

宮川　禎一

霧島山登山図を含む龍馬の慶応二年十二月四日の家族宛ての書状は幕末の絵入り手紙の代表例である。しかし私たちが良く知る絵葉書がこの日本で作られ始めたのは明治三十三年（一九〇〇年）以降のことだ。坂本・中岡の四十年祭（一九〇六年）で記念品として製作配布された絵葉書セット（京都便利堂製）が良い例である。

最近手にして紹介したくなったのは『廣瀬武夫からの絵はがき』（笹本玲央奈編二〇一八年）という図録だ。日露戦争の旅順港閉塞作戦で戦死した海軍少佐広瀬武夫が出した絵葉書のうち七十通を集成解説したものだ。個人的に広瀬が好きなこともあるが、それを越えて素晴らしい図録だと思う。広瀬がロシアから日本に居る父親や兄や義姉や姪っ子など家族に宛てた絵葉書が中心だ（彼はロシア駐在武官だった）。異国の風景に添えた愛情溢れる短い文章に彼の人柄が偲ばれる。葉書表裏の写真・翻刻・現代語訳・解説文のバランスも好ましい。ロシアでの投函日と日本の消印を見れば、明治三十年代に四十～五十日ほどで故郷である大分県竹田町の父親の許にちゃんと届いていることにも驚かされる。

広瀬に妻子はないが、東京に住む姪の馨子に向けて書いた絵葉書の一節はこうだ。犬が手紙を読む絵に添えて「コンダハネコノカワリニイヌノエヲヌクリマス、私ハコンナアンバイニアナタヨリノ御手紙ヲヨミマシタ」（明治三十四年・一九〇一年）というものだ。小さな姪っ子を可愛がる広瀬の様子が、春猪に「西洋のおしろいを送るよ」と書いた龍馬に重なって面白い。

西洋で絵葉書が発明されたのは一八六九年のオーストリア・ハンガリー帝国のことで、一八七〇年代以降、印刷技術の優れたドイツを中心に普及したという。広瀬武夫の絵葉書を見ながら、十九世紀末～二十世紀初頭の世界が郵便という通信手段で確実につながっていたという事実に不思議な感覚を覚えるのである。

広瀬神社の前に立つ
広瀬武夫の銅像（大分県竹田市）

“話してみるかよ”

「幕末史の主役」

渋谷　雅之

誰が主役かを見極めずに幕末史を考えると、単純な話が大変複雑になり、そのうちに何が何だかわからなくなる。

幕末の政局は、藩主に代わって主体的に行動できる重臣の存在が藩の命運を左右するといった非常事態の中にあった。小松帯刀（薩摩）、木戸孝允（長州）、中根雪江（越前）、辻将曹（芸州）などといった有力藩の重臣は、必ずしも藩主の命令の下に行動していたわけではない。彼らがどのような決断を迫られ行動したのかを現代人の我々は豊かな想像をこらしながら考察しなければならない。

身分の低い平士が政治に参加することは許されず、薩摩の大久保利通が主役に上り詰めたのは、囲碁という姑息な手段で島津久光に取り入ったことがきっかけだった話は有名である。まして、坂本龍馬や中岡慎太郎のような浪人が政治を動かすことなどあり得ないことだった。

草莽の志士たちが藩主級の大物や京都の公卿たちと平気で会談するといった情景は、当時奔流のように日本に流入していた西洋デモクラシーに向けた胎動のはじまりだった。しかしその胎動が現実の国体となり、日本に実現するまでには80年後の太平洋戦争終結まで待たなければならず、それからさらに70年後の今日、民主主義が日本に定着したとまでは言いにくい現状なのである。

幕末の時期、志士たちの言動や存在は政治の主役たちにとって各種の情報源だったり、使い捨ての駒だったりした。現代人が彼ら志士たちから学ぶべきものは、それでも時代を切り拓こうとした情熱や勇気である。龍馬には、それに加え土佐の空のようにひろびろとした自由があった。

コラム・龍馬のこと

「井上俊三について驚きの出会いが・・・」

宮　英司

桂浜の銅像の元といわれる写真は、慶応3（1867）年1月、長崎の上野彦馬スタジオで撮影されたものである。長い間、撮影者は上野彦馬と思われていたが、近年は上野彦馬の弟子であった井上俊三（土佐藩）が撮影したとする説が有力となっている。

井上俊三（1834～1907）は、高知城下で天保5（1834）年9月16日に出生。長崎で蘭学を学び、要法寺町で町医者となる。その後、慶応年間に藩命を受け、化学修業のため再び長崎に出向いた。この時、日本の写真家の始祖といわれる上野彦馬に弟子入りして写真術を習得した。写真術の習得は長崎にいた後藤象二郎の内命であったようだ。のちに大阪で写真館を開設し、大いに繁盛したらしい。やがて、高知に帰って農人町で写真業と西洋雑貨商の二つを営んだ。両方とも、高知の元祖であったという。

ところで、話は冒頭の出会いに戻る。ある宴席のこと。ある方が先祖の話をされていた。私が「井上俊三ですね。」と言うと、その方は「うちの婆さん以外の人からこの名前が出るとは…。鳥肌が立った。」と感激してくださった。そして、その場でお婆さんに電話をかけてくださり「いつでもいらっしゃい。」という約束までしてくださった。

井上俊三の子孫宅に「龍馬の写真は井上俊三が撮影した。」という言い伝えが残っているという。また、他の記録でもそのことが証明されつつある。今度、お婆さん宅を訪問した時にどんな話が飛び出すか。ワクワクしている。

高知県立坂本龍馬記念館・現代龍馬学会
〒781-0262 高知市浦戸城山830
TEL（088）841-0001　FAX（088）841-0015
mail:gendai-ryoma@kochi-bunkazaidan.or.jp